
NO FIXED
ADDRESS

敷居 7

決まった住所はない

ある人々の人生には、地理が地図であることをやめ、経験になる瞬間がある。

その日まで、世界は本の中に存在する。

写真の中に。

他人の語る話の中に。

テレビのニュースの中に。

やがて突然、それはニュースであることをやめ、歩むべき道になる。

私の場合、それはゆっくりと起こった。

特別な朝はなかった。

劇的な電話はなかった。

人生を以前と以後に分けるような告知はなかった。

ただ、一つの扉が開いた。

そしてその扉の向こうに、世界があった。

育った場所を離れるとき、最初に失うのは、自分の生き方こそが自然な生き方だという幻想だ。

それは健全な衝撃だ。

その瞬間まで、自分の周りで見てきたものが普通なのだと信じている。

やがて別の場所に着く。

そして、別の普通が存在することを知る。

別のリズム。

別の価値観。

別の恐れ。

別の希望。

そしてそのすべてが、自分のものと同じ尊厳を持っている。

初めのうち、私は観察していた。

耳を傾けていた。

理解しようとしていた。

どの国も、同じ人間の物語の異なる版を語っているように見えた。

言語は変わった。

顔は変わった。

習慣は変わった。

だが問いは、驚くほど同じままだった。

どうやって家族を築くのか。

どうやって尊敬を得るのか。

どうやって愛するものを守るのか。

どうやって未来に立ち向かうのか。

問いが異なるのは、いつも訛りだけだった。

中身は決して変わらなかった。

前日まで紙の上にしか存在しなかった都市に足を踏み入れるときの、驚嘆の感覚を覚えている。

空港。

駅。

ホテル。

会議室。

レストラン。

通り。

名もなき場所が、私の人生の章になっていった。

多くの人は、旅とは移動することだと思っている。

そうではない。

旅とは、視点を変えることだ。

大陸を横断しても、何も学ばないことがある。

逆に、一本の道を渡っただけで、変わって出てくることもある。

どんな目で見るかにかかっている。

長年、世界を観察しているのは自分だと思っていた。

やがて、世界が私を観察していたのだと知った。

どの文化も鏡のように働く。

自分が何者であるかについて、異なる像を返してくる。

ある国では忍耐を学んだ。

別の国では適応力を。

さらに別の国では規律を。

どの場所も、学ぶべきだと知らずにいた教訓を私に手渡した。

そしてそのたびに、以前は存在しなかった何かを私の中に残した。

長く外国で暮らすと、不思議なことが起こる。

「家」という言葉の意味が変わるのだ。

もはや住所とは一致しない。

もはや都市とも一致しない。

ときには国とすら一致しない。

もっと動きやすい何かになる。

もっと深い何かに。

もっと定義しがたい何かに。

家は、携えていけるものになる。

原則。

思い出。

愛する人々。

語り続ける物語。

それ以外のすべては変わりうる。

単純な真実を理解できるほど長く、さまざまな国で暮らしてきた。

人間は、恐れるものにおいてこそ、互いにずっとよく似ている。

忘れられることを恐れる。

愛する人を失うことを恐れる。

失敗することを恐れる。

痛みを恐れる。

時間を恐れる。

この普遍的な恐れの上に、私たちの存在の大部分は築かれている。

そしてまさにそこから、最も本物のつながりも生まれる。

違いの中からではない。

分かち合われた脆さの中からだ。

国を変えるたびに、何かを残していった。

友人。

習慣。

確信。

そのたびに、別の何かを得た。

新しい視点。

新しい関係。

新しい問い。

最終的な収支は、決して経済的なものではなかった。

人間的なものだった。

年月が経つほどに、国際経験とはパスポートにスタンプを溜めることではないと分かってきた。

内なる境界を広げることなのだ。

より頑なでなくなること。

自分の確信を、それほど過信しなくなること。

もっと好奇心を持つこと。

もっと耳を傾ける用意を持つこと。

世界はしばしば、語る者に報いる。

だが人生は、聴くことのできる者に報いる。

そして異なる文化に耳を傾けることは、この世に存在する最も有効な教育の形の一つだ。

ある時点で、国を数えるのをやめた。

フライトを数えるのをやめた。

移動したマイルを数えるのをやめた。

最も重要な距離は地理的なものではないと理解した。

精神的な距離だった。

偏見と理解を隔てる距離。

無知と知識を。

恐れと信頼を。

一つ一つの経験が、その距離を縮める助けになった。

そしてついに、予想もしなかったことに気づかせてくれた。

世界は私の周りだけで変わっていたのではない。

私の中で変わっていたのだ。

何年も前に旅立った人間は、もう存在しなかった。

その代わりに、物事を異なる角度から見ることを学んだ誰かがいた。

正しくあることよりも、理解することに関心を持つ誰かが。

違いに惹かれるよりも、似ているところに目を向ける誰かが。

結局、最大の変化は国から国へ移り住んだことではなかったと理解した。

狭い視野から、より広い視野へ移り住んだことだった。

まるで内なる住所が変わったかのように。

永遠に。

だからこの敷居は、国について語らない。

地図について語らない。

国境について語らない。

変容について語る。

なぜなら、世界が地理だけを変えるのではなくなる瞬間が来るからだ。

意味を変えるのだ。

そしてそれが起こるとき、世界を探すのはもうあなたではない。

世界のほうが、あなたの中で生き始めるのだ。

世界は住所を変えていた。

そして新しい住所は、私だった。